

## 表現—自問

山梨 今村 照廣

冬の『生活と風土と表現の会』が終わると、4月の『春陽展』（於；新国立美術館）に向けて版画制作に集中するのが例年の私の習いになっています。今年も3月末にやっと2点の木版画が刷り上がったその日、コロナ災禍による展覧会中止の連絡がはりました。また、山梨の版画グループで結成している『リトルバード展』（5月開催）も中止になり出品できなくなりました。昨年より企画が決まっていた『おいでやギャラリー』での個展（6月26日～7月6日・北杜市長坂町長坂上条2340）も無理だろうと思っていたところ、昨日、ギャラリーより再開の話があり、只今、個展に向けて再準備しているところです。

私が木版画に興味を持ち、制作したいと思い始めたのは20代後半です。創作版画と呼ばれる明治末期から大正、昭和期に活躍した山本鼎や恩地孝四郎、田中恭吉、竹下夢二など、また戦後国際的な舞台で活躍した棟方志功、斎藤清、清宮質文や郷土出身の版画家、萩原英雄や深沢幸雄、河内成幸などに興味を持ちました。中でも特に興味を持ち好きだったのが、英語の教師として生業を得ながら木版画制作をしてきた川上澄生でした。澄生のような屈託のない伸び伸びした作品を作りたいと思いました。

結局、制作に専念するようになったのは退職してからでした。

制作していくとどういふわけか、自分で楽しんでいるだけでは満足できなくなり、公募展へ出品するようになりました。出品してみると鏡に自分が写るように、拙ない自分が浮かび上がってきます。私の拘りで浮世絵以来の水色顔料で和紙使用の多色木版画で制作してきたのですが、どうも今まで築きあげた先人の文化を享受しているだけで、新しい文化を創りだしていないと思うようになりました。

数年前のある時、ある偶然から、版木の中から自然を引き出す方法があるのではないかと考えるようになり、新しい方法を試み始めました。借り物でない自分らしい表現が生まれるかもしれないという期待も膨らみました。

最新作『荒海』（写真）はその延長上の作品です。応募のコメントに次のようなことを書きました。

「版木を眺めていると、木の中に雲や霧など大気の流れを、溪流や大河など水の流れを、山脈や大地の起伏など読み取れることがある。また、素直に育った木だとか、屈折して育った木など木の経歴や環境、育んだ風土までも想像したりも



する。『荒海』は版木の中に潜む自然を、墨や和紙の力を借りて引き出し、荒海と共にある悠久な時間や空間を生み出したいと、挑んだ作品である。」

言うまでもなく、俳聖、芭蕉の胸を借り『荒海』を制作しました。

最初、荒れる海が表現できればいいかなと思い作品作りをしていったのですが、なかなかうまくいきませんでした。何度も何度も修正を重ねるうちに、悠久な自然の中に芭蕉が旅している姿が浮かんできました。そして、果てしない空間と時間の中で塵、芥のように浮遊する自分を思うようになりました。

いま、多色木版で制作した作品を見ると、「頭でつくっていたなあ」と思います。『荒海』は私の身体に馴染んだ表現になっているように思います。典型的な古い日本人としての私の発露のように思います。

長いこと子どもたちの表現に接する中で素直に表現した作品の魅力を知っているにも関わらず、自分で表現してみると頭が優先したり、技能や技術が優先したりしてしまいます。何をこそ、どのように表現するのか、原点に立ち返り、自分と向き合い制作したいと思っています。